



襖について

襖

それは、1000年以上の歴史を持つ、日本独自の建具。
日本の気候風土に合った間仕切りの機能を持ちながら、
室内装飾の主役というべき役割も果たしてきました。
あまりに身近すぎて、かえって知らないことの多い襖。
そんな襖の基礎知識を、あらためて紐解いてみました。

襖
今昔物語

襖
紙あれこれ

襖
の基礎知識

用語集



襖今昔物語

一歴史の中の襖

襖が生まれたのは、8～9世紀の頃。平安時代の貴族が住む寝殿造りの館で使われた「障子」という調度品が、襖の原型といわれています。「障子」は細い木の格子を骨組みとして両面に絹布や紙を貼り、周囲に縁を付けたパネル状のもので、これに台脚をつけたものが「衝立障子」、柱間にはめ込んで間仕切りとするものが「襖障子」と呼ばれていました。この「襖障子」がやがて引き戸方式になり、引手がついたものが現在の襖で、鎌倉・室町時代にその形が完成したといわれています。ちなみに、格子の片側にだけ薄い紙を貼ったものは「明かり障子」と呼ばれ、これは現在の障子となっています。襖の柄も、初期には中国伝来の唐絵が描かれていたものが徐々に大和絵に変わり、安土・桃山以降は武士の興隆にともなって権威と格式を表す絢爛豪華なものになっていきました。

一方、15世紀には茶道が確立し、茶室の意匠が襖の装飾にも影響を与えました。茶室で好まれた清楚な美は、抽象化された個性的な引手や唐紙(からかみ)の文様を生かしたデザインを生み出しています。江戸時代に入ってから襖の大衆化が進み、一般庶民の住居にも襖が普及するようになりました。さらに明治以降は、洋風建築の波が押し寄せ、襖においてもさまざまな和洋折衷が試みられました。現代においても襖はまた、新たなあり方を求められているといえるでしょう。



一現代の襖

襖には間仕切りとしての機能だけでなく、保温や防音、そして匂いの吸着などさまざまな機能があります。特に優れているのが、湿度の変化に応じて室内の湿度を調整する調湿機能です。現在の住まいは機密性が高まっていますが、湿度変化が大きい日本だからこそ、襖の機能はもっと見直されてもいいのではないのでしょうか。また、襖は使い次第で非常に機能的な空間が出来ます。日本古来の意匠や伝統にあらためて注目し、現代の生活にフィットしたインテリアを考えてみてはいかがでしょうか。





襖について



襖紙とは、襖の表面に貼られる上貼り紙のこと。構造面でも意匠面でも最も重要な役割を果たす部材で、図のように分類されます。

■襖紙の種類

■襖紙の製法

■襖紙の模様

襖紙の種類

■和紙襖紙

襖紙に用いられる和紙は、伝統的な手漉き技法(流し漉きなど)になるものと、特殊な抄紙機による機械漉きのものがあります。鳥の子については、手漉きのものには語頭に「本」の文字を付けて「本鳥の子」、機械漉きのものは「鳥の子」と区別しています。

本鳥の子 (ほんとりの子)	雁皮・三椏・楮など靱皮繊維を紙料にした手漉きの紙で、ツヤが美しく永持ちします。上質な鳥の子ほど施工時には十分な配慮が必要です。
鳥の子 (とりのこ)	本鳥の子が手漉きで作られるのに比べ、鳥の子は抄紙機で漉きます。紙料もさまざまで、機械によって風合いも手漉きに近いものがあります。
麻紙 (まし)	麻を紙料として漉いた強靱な和紙。襖紙には肉筆画を施す際によく使われ、また紙表に美しい雲肌をつくれるため、無地としても用いられます。
楮紙 (こうぞし)	楮を紙料とする最も強靱な和紙で、男性的な風合いがあります。他の紙料と漉き合わせたり、楮の黒川を装飾として漉き込むこともあります。
本鳥の子漉き模様 (ほんとりの子すきもよう)	下地になる手漉きの和紙の上に、三椏や楮の紙料で、流し込みなどのさまざまな技法で模様をつけたもの。手漉きならではの高級感があります。
鳥の子漉き模様 (とりのこすきもよう)	表の層は本鳥の子漉き模様と同じような紙料と技法を用いますが、下地になる和紙を手漉きでなく抄紙機で漉くため、価格的に安くなります。
上新鳥の子 (じょうしんとりのこ)	鳥の子の普及品で、すべて機械漉きのため比較的low価格。漉き模様や後加工によるさまざまな図柄があり、一般には略して『上新』と呼ばれます。
新鳥の子 (しんとりのこ)	製紙から模様付けまで一貫して機械生産される、最も廉価な襖紙。下地の透き止めのため紙裏が茶色のものが多く、『茶裏新鳥』と呼ばれます。



■織物襖紙

織物は伝統的に用いられた天然素材のものと、合成繊維を用いたものに分けられます。天然素材のものは主に高級な無地として用いられていますが、素材の性格上、合成繊維に比べて一枚ごとに織り上がりの風合いが違います。この変化が天然素材の面白さといえます。

天然素材の織物	
葛布 (くずふ)	葛の繊維を横糸に用いて織ったもので、強靱で耐水性に富んでいます。野趣に富む風合いが特徴で、古くから静岡県の掛川でつくられています。
絹 (きぬしけ)	繭の外皮のあら糸を横糸にした絹織物で、糸そのものの不揃いさが独特の風合いを生みます。絹の光沢を引き立てる様々な色に染められます。
芭蕉布 (ばしょうふ)	古くから沖縄に伝わる、縦糸に木綿や麻糸、横糸に糸芭蕉の繊維を用いた芭蕉布。現在は麻糸などを用いて張りのある風合いを表しています。
シルケット	横糸を麻、縦糸を木綿で織ったもので、平滑でなめらかな風合いが好まれ、天然素材のものの中では最もよく使われてきました。
合成繊維の織物	
上級織物	主としてドビー織などによる、縦糸・横糸ともに糸目の詰んだ高級な織物心すま紙です。加飾される絵柄も一枚ずつ丁寧に手加工されます。
中級織物	長繊維のレーヨン糸など、手ごろで変化のある風合いが好まれています。絵柄は手加工や最新の技術を駆使したさまざまな種類のものがあります。
普及品織物	レーヨン糸などを用いた低価格の織物襖紙。絵柄は特殊な輪転・オフセット・スクリーン印刷機などで加工され、画一的なものが多くなります。

■ビニール襖紙

塩化ビニールなどの合成樹脂製の襖紙で、耐水性と汚れにくさを特徴とし、水回りや廊下側、洋間側によく使われます。模様は無地朝のものが多く作られています。

[▲ページトップへ戻る](#)

和紙襖紙の製法

～楮を使った流し漉ぎの場合～

1. 伐採(ばっさい)

落葉が終わった10月～12月に刈り取りをし、一定の長さに揃えます。

2. 原木蒸し(げんまぐむし)

原木は節除きなどを行い、大釜で蒸し、皮をむきやすくします。



和紙襖紙の製法

～楮を使った流し漉きの場合～

1. 伐採(ばっさい)

落葉が終わった10月～12月に刈取りをし、一定の長さに揃えます。

2. 原木蒸し(げんまくむし)

原木は乾燥しないうちに大釜で蒸して、皮をはぎやすくします。

3. 剥皮作業(はくひさぎょう)

蒸し終えた原木にすぐ冷水をかけ、一気に樹皮をはぎます。はいだ皮を「黒皮」といいます。

4. 黒皮剥ぎ(くろかわはぎ)

黒皮を水に浸し、表皮を洗い流します。さらにその下の甘皮を除いて繊維質だけになります。これを「白皮」といいます。

5. 白皮(しろかわ)

白皮を天日で乾かします。寒風に晒すほど質がよくなり、雪がかかると漂白効果があるともいわれています。

6. 煮熟(しゃじゆく)

白皮に含まれる不純物を溶かすため、アルカリ性の木灰やソーダ灰などを加えて大釜で煮ます。

7. 塵取り(ちりとり)

煮熟した白皮をよく水洗いし、不純物や塵を取り除きながらアクを抜きます。

8. 叩解(こうかい)

白皮を棒でいねいに叩き、繊維を一本ずつバラバラにします。



9. 紙出し

叩いた白皮を布袋に入れ、きれいな水の中でさらします。これで紙料ができあがります。



10. ネリ作り

トロロアオイの根を碎き、でてくる粘液をろ過してネリを作ります。



11. 紙漉き

漉き舟で水と紙料を混ぜ、ネリを加えて十分に攪拌します。漉管(すきず)で紙料をすくい、繊維を平均に絡み合わせるよう揺すりながら、求める厚みになるまで何度も繰り返します。この揺すりながら漉く方法を流し漉きといひます。



12. 压榨(あっさく)

漉き上げた湿紙は管からはずし、一枚ごとに布を挟んで紙床板(しといた)に重ねます。一晩おいてさらに残った水分を取るため重力を加えて搾ります。



13. 板長じ

湿紙を一枚ずつ干し板に伸ばしながら張りつけます。ネリの作用で完全に一枚一枚剥ぐことができます。



14. 乾燥

干し板を日光で干したり、乾燥室に入れて熱風で乾燥させたりします。



和紙襖紙の模様

◆抄紙技法による分類

一般に漉き模様と呼ばれるもので、紙を漉き上げる工程の中で、さまざまな模様をつける技法です。これらの技法は単独でも用いられますが、併用することでより繊細な表現ができます。

1. 打雲(うちぐも)・飛雲(とびぐも)

打雲は、紙の天地に雲がたなびいたように藍や紫の繊維を漉きかけたもの、飛雲は同様の技法で空を飛ぶ雲を表したものです。現在ではこの技法を発展させ、草花・山水などさまざまな模様が漉かれています。

2. 雲竜紙(うんりゅうし)

打雲の技法と流し漉きの特長を巧みに利用したもので、着色した繊維や手ちぎりの長い繊維などを使い、紙全体に雲の模様をつくりだします。この雲竜紙は漉き模様紙の中でも最も種類が多くて普及しています。

3. 水玉紙(みずたまし)・落水紙(らくすいし)・水流紙(すいりゅうし)

管の上の湿紙に水をかけて模様をつくる技法です。水玉紙:水滴を散らして、水玉模様をつくります。落水紙:湿紙の上に型を置き、水滴を落として模様をつくりだします。水流紙:ジョウロや複数の穴の空いたパイプなどで水を流し、縞状の模様をつくります。

4. 塵入り紙(ちりいし)

本来はそぎ落としていた楮の表皮(黒皮)などの素材をあえて漉き込み、素朴な味わいを生み出します。

5. 漉き合わせ紙(すきあわせし)

塵入り紙と違い、最初から装飾目的で2枚の紙の間に紅葉や笹など、さまざまなものを漉き合わせる技法です。

6. 金銀粉(きんぎんふん)、雲母粉混入紙(うんもふんこんじゅうし)

三椶の繊維とよくからみ合わせた金銀粉、雲母粉を通常の紙料と一緒に漉き込む、上品な表現です。

7. 流し込み模様紙(ながしこみもようし)

湿紙上に模様の形の木や金属の型枠を置き、その中へ染色された紙料を流し込むことで模様をつくります。

8. 引っ掛け紙(ひっかけし)

水槽の中に浮遊している三椶や楮の繊維を薄い金属板のへりに引っ掛けて持ち上げ、別に漉いておいた湿紙に付着させる技法です。

9. 透き入れ紙(すきいれし)

管の上に紗(シャ)の型紙を貼って漉き、紙面に凹凸を与えて模様をつくります。

このほか、檀紙(だんし)、布目紙(ぬのめし)、置き模様紙、大正水玉紙(たいしょうみずたまし)など、さまざまな種類の技法があります。



◆加飾技法による分類

～金、銀箔などの技法～

金箔・銀箔・プラチナ箔・銅箔などを用いて加飾する、華麗で伝統的な技法です。

1. 金銀砂子細工(きんぎんすなございく)

金銀の箔を上質の竹筒に網を張ったものに入れ、蒔き散らしながら模様をつくります。蒔絵が金粉を用いるのと違い、砂子細工は金箔を用います。

2. 箔押し(はくおし)

金箔や銀箔などを貼り付ける技法で、襖の表面に膠(にかわ)で貼り付けます。金屏風のように紙面全体に箔押しするものを「平押し」といいます。

3. 截金(きりがね)

厚めの箔を細長く截り、貼り付けて模様をつくります。箔押しが箔一枚のまま貼り付けるのと違い、必要な大きさに截り、直線や曲線状に貼り付けます。

～木版による技法～

模様を彫った版木に顔料・染料をのせて和紙に写し取る技法と、木版を和紙の下に敷いて紙表から模様を磨き出す技法とがあります。

1. 雲母押し(きらおし)

模様を彫った版木に、雲母と糊を混ぜた絵の具をのせ、その上に和紙をおいてやさしく写し取ります。ふっくらした柔らかさがあります。

2. 漆押し(うるしおし)

にじみを防ぐため礬水(どうさ)を強めに施した和紙に、版木にのせた漆を写し取ります。経年とともに生漆の光沢が和紙の風合いになじみます。

3. 磨き出し(みがきだし)

薄めの和紙の表にあらかじめ銀泥や銀砂子を施し、模様を彫刻した木版の上で紙の表を研ぎ、模様を銀のグラデーションで浮き立たせる技法です。

～型紙による技法～

型紙の上から顔料・染料を摺り込む技法で、柿渋で強度と耐水性を与えた和紙にさまざまな模様が彫られた型を、洪型といいます。

1. 置き上げ(おきあげ)

和紙の上に洪型を置き、雲母(きら)や胡粉(ごふん)を竹べらで摺り込む技法。型紙の厚さによって厚みのあるシャープな模様になります。

2. 更紗(さらさ)

織物に絵の具をボタン刷毛で摺り込むため、多彩で柔らかな表現ができます。主に唐草などの伝統的な模様(更紗模様)に使われます。



～刷毛引きによる技法～

さまざまな刷毛を用いて金銀泥や顔料を引き染めします。刷毛を押しつけたり揺すったり引いたりして、独特な風合いを表現します。

1. 泥引き(でいびき)

和紙に金泥・銀泥を刷毛を用いて引き染めします。金・銀箔のメタリックな表現と違って穏やかな落ち着いた金・銀色が表現できます。

2. 丁子引き(ちょうじびき)

櫛状に間引いた刷毛などを用いて不規則な丁子模様(縞模様)を引き染めします。

3. むしろ引き

むしろや縄の上に湿った和紙をのせ絵の具を含んだ刷毛で引き、むしろの凹凸を利用した味のある縞模様や格子模様をつくります。

4. ぼかし染め

水を含ませた1尺～1.2尺寸の刷毛に、筆で絵の具を浸み込ませて引き染めします。一丁の刷毛で柔らかなグラデーションをつくります。

～揉みによる技法～

和紙を繰り返し四方から揉み、その揉み皺を模様とします。繰り返し揉むために紙は強度のある手漉きの楮紙などを使います。

1. 雲母揉み(きらもみ)

雲母引きした紙を揉むと、皺の部分の雲母が剥落して味が出ます。あらかじめ雲母と調和した絵の具を地引きすることもあります。

2. 水揉み(みずもみ)

礬水(どうさ)などを引いて強い耐性をつけた和紙に淡い色の染料を刷毛染めし、濡れたままで揉みます。揉み皺の礬水(どうさ)が剥がれてそこだけ強く浸み込み、揉みの風合いを際立たせます。



・近年の加工技法

1. ピース加工

エアースプレー(エアースプレー)を用いた方法で、ぼかしの柔らかな表現が特長です。手作業での彩色は、特に金銀色のぼかしは独壇場です。

2. スクリーン印刷

枠にスクリーン(紗)を張ったものに模様を焼き付け、スキージを用いて模様を摺り込みます。濃淡の変化などをつけるのが容易です。

3. オフセット印刷

平版印刷の一種で、通常のオフセット印刷を改良して、織物への印刷にも対応します。微細で精緻な表現が特長で、量産性も高い技法です。

4. 輪転印刷

襦紙用の特殊な輪転印刷機を使います。巻き取りの紙や織物に高速で印刷し、廉価で均質、施工性の良さなどの特徴があります。



襖について



■襖の構造

■襖の用途と名称

■襖の開閉様式と名称

■模様配置

■縁について

■引手について

襖の構造

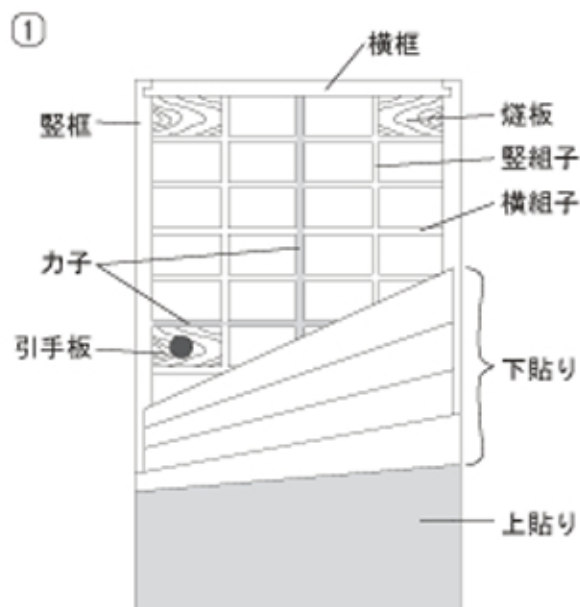
襖は大きく分けて襖紙(上貼り)、下地、下貼り、縁、引き手で構成されています。伝統的な手法でつくられる襖は、下地材に木製の組子を使用し、この組子の上に下貼りが重ねられています。一方、現在の襖はこうした行程を簡略化し、工場生産に適したタイプが主流になっています。なお、仕上がった襖は普通「本」の単位で数えます。

■下地材による襖の種類

襖は下地材によって2種類に大別できます。一つは木製の組子が入っているもの(1~4)で和襖と呼ばれ、もう一つは組子が入らず、段ボール・プラスチック樹脂系板などが芯になっているもの(5~7)で、量産襖と呼ばれます。

1)組子襖

昔からの襖で、現在でも代表的なものです。一般的には組子は縦三本、横十一本で組み、この組んだものを骨地と呼びます。特に構造を強化したい場合はカ子、燧板(隅板)を加えることがあります。普通は組子骨地の上に何層もの下貼りを重ね、最後に上貼りが貼られます。組子襖は、湿度温度への適応性があり、貼り替えの即応性もあります。



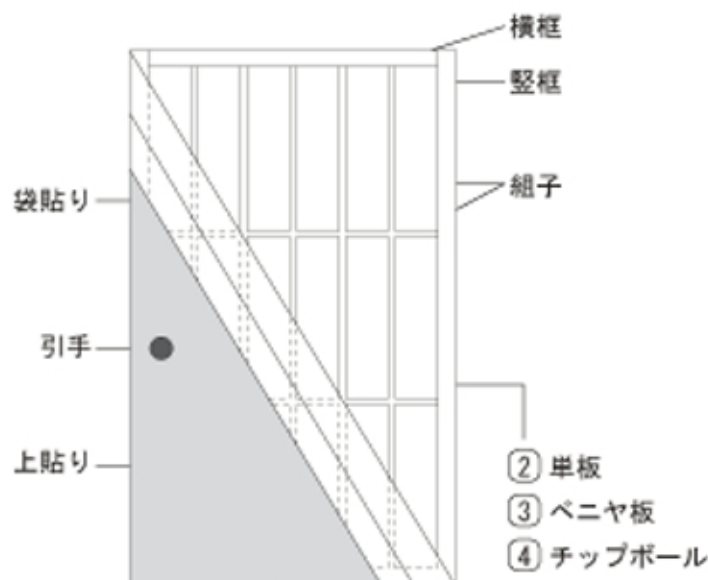


2) 単板襖

簡単に組んだ組子の上に、単板(ラワン材などの木材を0.7mm~1.2mmに薄くそいだもの)を貼った襖で、地域によって単板の厚さや組子の本数に多少の違いがあります。単板襖は、ダンボールや発泡プラスチック系に比べて、寸法物への対応性に劣ります。また、紙貼りの作業ではチップボールにはかきません。そのうえ、やや重量感に欠けることがあります。

3) ベニヤ襖

単板襖と同じ構造で、組子の上に2.7mm程度の厚めの合板(ベニヤ板)を貼った襖です。この襖は、ほかの種類の襖に比べ丈夫なことが特徴です。ただし、かなり重量があります。最近では、片面は襖紙、片面には壁紙などが貼られた「戸襖」と呼ばれるものもあります。



4) チップボール襖

簡単に組んだ組子骨地の上に、0.7mmほどのチップボール(ボール紙の一種、チップボードともいう)を貼った襖です。組子の本数が少なく、下貼りの手間も短縮できるので、現在はこの下地を使用した襖が一般的に主流となってきています。

5) ダンボール襖

量産襖の代表的な襖です。3層ぐらいに重ねたダンボールを芯材として、一番上のダンボールの両面には、湿気防止用のアルミ箔が貼られています。この襖は、張り替えがしにくく、そり、ねじれが発生しやすいという欠点をもっていますが、芯材を機械生産することができるため、コストが安くすむという大きな特長があります。

6) 発砲プラスチック襖

プラスチックの発泡体を芯材とした襖です。プラスチックの種類にはスチロールとスチレンの2種類がありますが、スチロールを使っているものが大半を占めています。この襖はダンボール襖と同じように張り替えの点や、そり、ねじれが発生しやすい点で他の襖に劣りますが、大量生産ができるのでコストが安く、寸法詰めも自由になるという利点があります。

7) その他の襖

A) ペーパーコア襖

ボール紙や単板芯の中空のところにハニカム状のペーパーコアを入れることで強化した襖です。そりやねじれが少ないですが、価格は高くなります。

B) アルミ(縁)襖

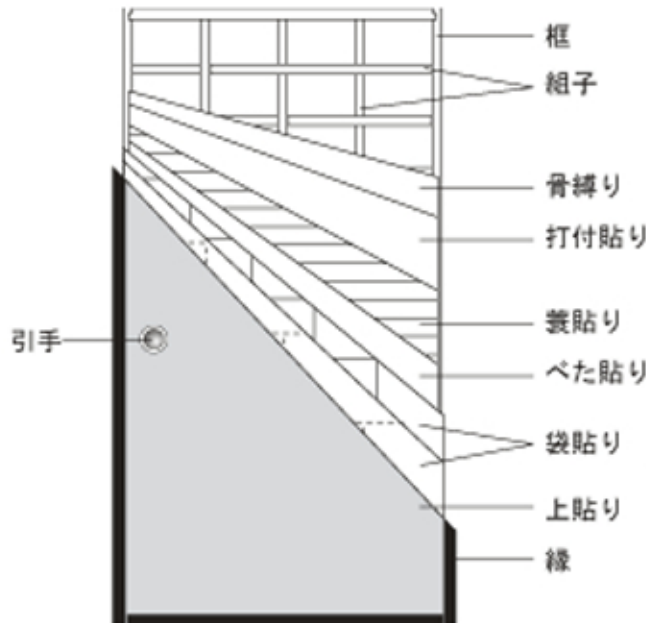
襖の縁にアルミ製の縁を用いた、新しい襖です。単板芯以外の従来の芯材が使われています。なかでもダンボール芯と発泡スチロール芯を使ったものが主流です。



■下貼り、上貼りについて

下貼り

下貼りは、そりやねじれ防ぎ、表面の質感をふっくらと見せる役割があります。襖のグレードは、下貼りで決まるといっても過言ではありません。下貼りに使う紙は、細川紙・石州半紙・代用石州・茶チリ・桑チリ・漉き合わせなどがあります。



※下貼りは七遍貼り仕上げ

1)骨縛り

骨がゆがむのを押さえて固定するために、最初に行われるものです。組子側に糊をつけて、手漉き和紙・茶チリ・桑チリなどの強い和紙を障子貼りのように貼ります。

2)打ち付け貼り

骨縛りを補強し、骨が透けて見えるのを防ぐもの。「骨縛り押し貼り」とも呼ばれます。反古紙や、紫色などの濃い色に染めた透かし止め紙が使われます。

3)養貼り

和紙をずらしながら養のように何層にも重ねて貼ることで、クッションのような働きをします。代用石州など、薄手の手漉き和紙を貼り継いで巻紙にしたものを使います。

4)べた貼り

養貼りをしっかり押さえるために、紙の裏面全体に糊を付けて貼ります。反古紙、細川紙などの手漉き和紙が使われます。

5)袋貼り

上貼りを貼ったときにぴんと張りがありながら、ふっくらと柔らかな仕上がりにするための行程です。半紙または薄手の手漉き和紙・石州半紙・代用石州・茶チリなどの紙に、四辺にだけ細く糊を付け、中空の状態で貼り継ぎます。「浮け貼り」ともいわれます。

6)清貼り

上貼りの紙に薄いものが使われる場合、薄手の上質の和紙を貼って裏打ちにすることがあります。紙の全面に薄い糊を付け、襖全体に貼ります。

上貼り

上貼りは、素材によって紙・織物・ビニールに大別されます。[\(襖紙の種類を参照\)](#) 上貼りの種類、材質などによって、施工の際に糊の濃さを加減するなど、細かい配慮と高度な技術を要します。



襖について



【あ】 【か】 【さ】 【た】 【な】
 【は】 【ま】 【や】 【ら】 【わ】

→ その項を参照
 ⇒ その項に解説
 ⇔ 対義語・反対語
 = 同義語

【あ】

あかりしょうじ(明り障子)

古くは襖も衝立も一括して障子(そうじ)と呼んでいた。絹や紙を貼ってあったものはよく外光をとり込むため、これを明り障子と呼び、襖障子と区別した。今日では障子といえばこの明り障子のことをさす。中世以降腰に板を用いるようにもなった。→ふすましょうじ(襖障子)

あさおりもの(麻織物)

麻の糸で織ったもの。麻は苧麻、大麻、亜麻などの繊維。

あずま障子(東障子)

紙の代わりにガラス、もしくは和紙を貼ったガラスを入れた障子。ガラスの分だけ重くなる。

あらま障子(荒間障子)

組子を荒く組んだ障子。

あるみぶちぶすま(アルミ縁襖)

アルミの縁を使った襖。

いたぶすま(板襖) = ベニヤぶすま(ベニヤ襖)

簡単に組んだ組子の上に下貼りの代わりに厚めの合板(ベニヤ)を貼った襖。最近では片面に襖紙、片面に壁紙などを貼った「戸襖」もある。

いっばんびき(一本引き) = かたびき(片引き)



戸、襖の開閉方法には引きと開きがある。引きは敷居と鴨居の溝の中を左右に滑らせる方法。溝が1本の場合を一本引きという。

いんろう(印籠) = いんろうぶち(印籠縁)

襖の縁の内側に骨が入るように削りとってある縁のことで、ほぞの違いなどにより、本印籠、皿印籠、片印籠の3種がある。建築でいう印籠とは異なる。

うちぐも(打雲)

漉き模様の技法のひとつで、最も古典的かつ伝統的なもの。

うちつけばり(打ち付け貼り)

光線による襖の透けなどを防ぐために行う下貼りの工程。

うちのりすんぼう(内法寸法) = うちのり(内法)

外枠を除いた内部寸法。建具に関しては溝の深さに関係なく敷居と鴨居との間の寸法(高さ)と柱と柱の間の寸法(幅)。

うらうち(裏打ち)

裏に腰の強い紙や布を貼りつけて表面に用いられた薄い紙、布などを補強すること。

うらがみ(裏紙)

押入襖などの裏側(押入側)に貼る紙。おもに雪華紙などが用いられる。

うらばり(裏貼り)

押入襖などの裏側に紙を貼ること、また、貼るものをいう。主に雪華紙を用いる。

うるみ(潤み)

漆の色のひとつ。潤むとは曇る、黒みを帯びるの意。褐色、鉛色の塗りを意味し、黒漆に朱や弁柄を混ぜてできる。混入の割合で幅広い茶系の色ができる。襖の縁に多く用いられる色がこの潤みである。「妹」の字を当てることもある。

うわがみ(上紙) ⇒ うわばり(上貼り)

うわばり(上貼り)

襖、壁、天井などに最後に表面に貼るもの、及び貼ること。貼る材料はいろいろあるが、襖の場合は絹、麻、綿などの布貼り、鳥の子をはじめとする紙貼りがほとんどである。下貼り・中貼りのあと仕上げとして美しく、皺のよらぬよう四辺を濃い糊で貼り、乾燥してピンとなるよう素材に応じて特殊な技術を駆使する。⇔したばり(下貼り)



うんかし(雲華紙)

漉き染めの鳥の子紙に白い繊維が漉き掛けられた紙で、現在は襦の裏貼りによく用いられる。語源は、漉き上がりが空に浮かんでいる雲に見えることに由来する。→うらばり(裏貼り)

うんりゅうし(雲竜紙)

漉き模様の技法のひとつで、紙面全体に雲の模様をつかった紙。漉き模様の中でもっとも種類が豊富。障子紙に用いられるものもある。

えちぜんわし(越前和紙)

福井県・今立町にある五つの村、「不老、大滝、岩本、新在家、定友」が昔から五箇と呼ばれ、越前和紙の産地。→てすき(手漉き)・わし(和紙)

えどま(江戸間)⇒かんとうま(関東間)⇔きょうま(京間)・ほんま(本間)

えんしゅうごのみ(遠州好み)

江戸時代前期の茶人、小堀遠州の好んだというもの。遠州は家光の茶道師範を務め、絵画・和歌・建築・造園・陶磁に造詣が深かった。

おびもよう(帯模様)

襦につける帯状の模様。位置は引手中心のもの(引手帯)と、下の縁から25~30センチほどあげて30センチぐらいの幅で模様をつけたもの(腰帯)とがある。

おふせつといんさつ(オフセット印刷)

一般的な印刷方法で、代表的な平版印刷。

[▲ページトップへ戻る](#)

【か】

かきえ(書絵)

襦では肉筆画を指す。特注で製作するもので、さまざまな絵模様が描かれる。

かしゅう(カシュー)

カシュー塗料の略。ウルシ科の植物カシューの実に含まれる液を原料にして作った塗料で漆の代用として用いられる。漆に似た性能をもち、水や油、薬品などにも強く、光沢がある。また、この塗料を作って売る会社の商品名でもある。

かたびき(片引き)⇒いっぽんびき(一本引き)



かたびらき(片開き)

1本の襖の片側に丁番を取り付け、その反対側に取手を付け、開閉して使用する襖。

かまち(框)

建具の部材の名称。外周にめぐらす部材で縦框と、横框がある。縦框だけを単に框、横框を棧と呼ぶこともある。

かみすき(紙漉き)

紙漉きには、「流し漉き」と「溜め漉き」の二つの方法があり、襖紙は流し漉きで行います。→[襖紙の製法](#)

かもし(鴨居)

建具をはさんでいる上部の横木を鴨居という(下部の横木は敷居)。戸や襖を建て込むための溝がある。

かもうえ(鴨居上)

鴨居と天井の間の物入れの小襖をいう。現在では天袋ともいう。

からかみ(唐紙)

字義からは平安時代に唐から輸入された高級紙。転じてそれを使った襖障子。鳥の子に模様を刷り出した唐紙を貼ったものを唐紙障子と言った。絹貼りの障子に対しての図柄が豊富で愛用され、後世では唐紙障子を単に唐紙とだけ言うようになる。無地のものを襖、図柄のあるものを唐紙障子と区別した時代もあるが、今日では襖と同義語で用いられている。

かわりおり(変わり織)

襖の上貼りに用いる織物で横糸(緯糸)に変化をつけたもの。

かんとうま(関東間) = えどま(江戸間)

柱と柱の距離が1間(182センチ)の場合、内法寸法の1間と柱の芯から芯までの1間とでは違いが出る。前者は関西の計りかたで京間、後者は関東の計りかたで関東間という。関東間のほうが狭く、柱の太さによって襖の大きさも一定しない。三河の計りかたが徳川とともに江戸にもたらされた結果という。

⇨[きょうま\(京間\)](#)・[ほんま\(本間\)](#)

かんのんびらき(観音開き)

4枚開き、もしくは6枚開きなどの折り戸。現在では2枚開きのものもいうことがある。

がんびし(雁皮紙)

沈丁花科の植物・雁皮の繊維を原料として漉いた紙。緻密な滑らかさを持ち、薄く上品で光沢がある。害虫に強く、防湿性にも優れている。本来は鳥の子といえば雁皮紙をさす。今では、生漉きのものとしては本鳥の子特号紙がある。



きかいずき(機械漉き)

「手漉き」に対して機械で漉いた和紙をいう。丸網抄紙機や短網抄紙機で漉き、原料は主として、木材パルプ、故紙、マニラ麻など。特殊なものとして、靱皮繊維(雁皮や三椏など)を用いたものもある。和紙としては、襖紙、障子紙、ちり紙、書道用紙などがつくられる。⇨てすき(手漉き)

きじぶち(木地縁・生地縁)

素材としての木の持ち味を生かして、木目の見える木肌の縁。檜、杉、ひば、櫟、スプルーエスなどを用いる。⇨ぬりぶち(塗り縁)

きぬしけ(絹紵)

絹織物の襖紙のひとつ。

きゅうし(九四)⇨きゅうしゃくよまいだち(9尺4枚立)

きゅうしゃくよまいだち(9尺4枚立)

内法幅9尺の間に4枚の襖が入るもの。九四とも呼ばれる。

きょうからかみ(京からかみ)

伝統的な襖紙のひとつ。版木を用いて雲母などで和紙に摺ったもの。京都ならではの模様がある。→きらおし(雲母押し)

きょうじ(経師)

本来は仏教の経巻を仕上げる工人のこと。紙や布によるこの工芸技術は経本、折本ことどまらず、掛軸、屏風の表装などに欠かせぬもの。中世より後は障子や襖、額、天井貼り、壁貼り、家屋の内装まで広く扱うようになった。現在では経師屋、表具屋とも呼ばれている。

きょうま(京間) = (本間)

柱から柱までの距離の計りかたには伝統的に二通りあり、柱から柱の内法寸法を計るのが関西方式。これを京間という。また、柱の芯から芯までを計るのが関東方式。これを江戸間という。京間のほうが襖が大きくなり、サイズが一定になる。柱間寸法6.5尺を1間とするものを本京間、6.3尺を1間とするものを中京間という。⇨えどま(江戸間)・かんとうま(関東間)

きら(雲母)

キララともいわれる、銀灰色の雲母の粉末。金箔・銀箔のメタリックなものにくらべ、やわらかくしっとりとした独特の光沢があり、古くから日本画の顔料の一つとして使われている。どの顔料ともよく混ざり、ひそやかないぼし銀のような上品さがあり昔から襖の顔料として多く用いられている。→きらおし(雲母押し)

きらおし(雲母押し)

伝統的な唐紙に模様を施す技法。版木を用いて雲母で模様を押すこと。→きら(雲母)



きらびき(雲母引き)

泥引きの一種で、雲母を紙に刷毛引きすること。

きらもみ(雲母揉み)

雲母引きした紙を揉み、揉皺の雲母を剥落させ変化をつける技法。

きんからかみ(金唐紙)

模様が彫刻された木製のロールを用い立体的に模様を写した壁紙。本来は金唐皮を紙で模したもので、明治時代に壁紙として輸出された。

きんぎんすなございく(金銀砂子細工)

伝統的な金・銀箔の加飾技法のひとつ。金銀の箔を上質の竹筒に紗を貼ったものこいれ、蒔き散らしながら模様を削り上げる。

きんでい(金泥)

本金箔からつくる金色の絵の具。金箔を根気よく膠(にかわ)液の中に刷り込んでつくる。日本画の彩色や泥引きに用いる。

きんぱく(金箔)→はく(箔)

ぎんぱく(銀箔)→はく(箔)

くずふ(葛布)

葛の繊維を用いた織物。強靱で耐水性に富む。その丈夫さと野趣に富む風合いから襦紙などに使われている。

くみこぶすま(組子襦) = わぶすま(和襦)

伝統的な構造でつくられた襦の呼称。骨襦とも呼ばれる。格子状に組まれた下地骨に下貼りをして仕上げた襦のことで、一般に襦といえばこれを指す。

くもがた(雲形)

襦紙の模様で、雲のたなびいた形。またわそれを表した模様。

げんじぶすま(源氏襦)

部分的に障子窓を配置した襦。これにより採光が可能になる。障子窓の形によってデザイン的な変化を楽しめる。中抜き襦とか御殿襦とかの呼び名があるが、御殿のような大邸宅では外部に接することのない暗い部屋の採光をこの中抜きによって少しでも良くしようとした工夫がうかがえる。地域によっては「長崎襦」とも呼ばれる。



こうぞし(楮紙)

楮を原料として漉いた和紙。和紙の中で最も強靱で、その風合いは独特で男性的な表現ができる。

こしほり(腰貼り)

壁の下部に別の紙を貼ること。本来は壁の上塗りの保護のためだが、装飾的な効果もある。白い美濃紙の柔らかい裏面を表にして貼るか、湊紙、鳥の子、奉書紙などが使われる。襖の場合も同様に下部に別の紙、布を貼ることをいう。

こしもよう(腰模様) = すそもよう(裾模様)

襖の模様が下部にだけあるものを腰模様という。

ごふん(胡粉)

日本画に用いる白色の顔料。

[▲ページトップへ戻る](#)

【さ】

さらさ(更紗)

襖紙に模様を施す技法のひとつ。洪型を用いて、絵の具をボタン刷毛で摺り込む。

しきい(敷居)

建物をはさんで溝のある下部の横木。

したほり(下貼り)

襖や壁の下ごしらえとして貼る紙、および貼ること。細川紙、石洲半紙、代用石洲、茶チリなどを用いる。骨を補強し、最終的な上貼りの仕上げを美しくするために不可欠なもの。⇔[うわほり\(上貼り\)](#)

しっし(湿紙)

漉き上げたばかりの濡れた状態の紙。

しぶがた(洪型)

型染めに使う型紙。洪紙に模様を写し、彫って型紙をつくる。襖紙では、置き上げ、更紗などに用いる。洪紙ともいう。

しぶがみ(洪紙)

手漉きの和紙に柿洪を塗ったもの。耐水性と強度が増す。→[しぶがた\(洪型\)](#)



じぶくろ(地袋)

部屋の下部に取り付けられる戸棚の襖。床の間の違い棚の下、仏壇の下などに用いられる。地袋の上貼りは部屋の襖と合わせ、デザインの統一をはかることもある。⇔てんぶくろ(天袋)

しゃおり(紗織)

縦糸(経糸)が綿糸、横糸(緯糸)がマニラ糸で織ったもの。新紗織と区別するために本紗織ということもある。

しよいんづくり(書院造り)

桃山時代に完成し今日の和風住宅の原型となった住宅様式。別々の建物を渡り廊下でつなぐ寢殿造りと違って、一つの建物の中を仕切って複数の部屋を合わせる様式。主室である上座の間には床の間、違い棚、書院がつく。間仕切り引き違い戸、襖、障子などが使われる。平安貴族の邸宅であった寢殿造りに対して、武家住宅を代表する。

しょうじがみ(障子紙)

障子に貼る紙。外光を適度に和らげ、部屋の内外を隔てながらも外の気配を映し、通気性、保温性を保つ。さらに貼り替えがきくという和室特有の機能美を演出するものとして重要。美濃紙や半紙を使う。採光に良く腰の強さをかわれて最近ではプラスチック障子紙などが出回っている。

じょうしん(上新)⇒じょうしんとりのこ(上新鳥の子)

じょうしんとりのこ(上新鳥の子)=じょうしん(上新)

鳥の子の普及品で、紙はすべて機械漉きのため比較的low価格で均質な特徴をもつ。

しょうへきが(障壁画)

建物の内部の壁紙や障屏画のこと。平安時代以来、壁画や襖、屏風などが日本画の画面形式として用いられ、特に桃山時代から江戸時代にかけて装飾性に富む豪華な作品がつけられた。

しるすつと(シルケット)

横糸に麻、縦糸に木綿を使った織物。

しんしゃおり(新紗織)

本紗織の風合いをスフ糸で織ったもの。織物の襖紙の中ではもっとも廉価。→しゃおり(紗織)

しんとりのこ(新鳥の子)=ちゃうら(茶裏)

襖紙の中で最も廉価な和紙。製紙から模様付けまで一貫して機械生産される。新鳥ともいう。



じんぴせんい(韌皮繊維)

植物の茎などの周辺部(外皮の内側)にある繊維。強靱で抵抗力が強い。伝統的な和紙の原料として用いられ、雁皮、三椏、楮、マニラ麻などがある。

すいりゅうし(水流紙)

漉き模様の技法のひとつで、水滴で直線や曲線の縞状の模様をつかった紙。

すきあわせ(漉き合わせ)

本来は、2種の紙料を重ね漉きしたもの。下貼りの場合は、骨縛り用の紙(骨紙)とべた貼り用の紙とを漉き合わせた紙をいう。

すきあわせし(漉き合わせ紙)

漉き模様の技法のひとつで、2枚の紙の間にさまざまなものを漉き合わせた紙。

すきいれし(透き入れ紙)

漉き模様の技法のひとつで、紙面に凹凸を与えて模様をつかった紙。

すきぞめ(漉き染め)

伝統的な和染めの手法を受け継ぐもので、紙料の韌皮繊維(雁皮・三椏・楮など)を叩解したのち、ネリと染料を加え漉き上げること。例外として、藍染め紙だけは原料が直接染め付けしにくいいため、漉き上げた和紙を藍染めし、再び叩解して紙料に戻し漉きなおす。

すきどめ(漉き止め)

襖の下地が透けて見えるのを防ぐために貼るもの。

すきもよう(漉き模様)

抄紙工程の中で、さまざまな技法で模様をつけること。繊維によって光沢や色などに変化をつけ、柔らかく模様を浮かだたせる。

すきやづり(数寄屋造り)

茶室、勝手、水屋などが一棟に備わった建物を言うが、茶室風の建物を指すこともある。

すくりんいんさつ(スクリーン印刷)

捺染印刷ともいう。型枠にスクリーン(紗)を張り、模様をやきつけ、スキージ(へら)で絵の具をこすって模様をつける。

すみながし(墨流し)

水面に揮発性の油を浮かし、その上に墨、あるいは染料を流してその模様を紙や布に吸着させてうつしとる技法。



せきしゅうはんし(石州半紙)

石見国(島根県)から産出する楮漉きの半紙。版画用紙、障子紙、襖の下貼り紙などに用いる。

そうもよう(総模様)

襖紙の全面に模様をつけたもの。

そでもよう(袖模様)

襖紙の右側、左側の片方にのみ縦に模様をつけたもの。

[▲ページトップへ戻る](#)

【た】

たいこぶすま(太鼓襖) = ぼうずぶすま(坊主襖)

縁をつけず上貼りで周囲を包む襖。太鼓張り襖ともいう。このため、仕上がり寸法より大きい紙幅が必要となる。間中(3尺幅)の襖でも、幅広の襖紙を使わなければならないこともあるので、注意を要する。縁に邪魔されずにデザインしたいときに利点がある。茶室では引手は切引手を使うことが多い。表裏の上貼りが異なる場合は張力の差をあらかじめ考慮する必要がある。

たけなが(丈長)

高さが5尺8寸を超える襖のこと。

だみえ(濃絵)

桃山時代を中心に栄えた彩色をまどこした絵。

ためずき(溜漉き)

中国古来の紙漉きの技法。日本独自の流し漉きと違い、ネリを用いない。一枚ごとに管桁の中の水を簾の間から自然に落として漉き上げる。襖に用いる手漉き和紙では、漉き模様の模様付けなどの際に用いることがある。→ながしずき(流し漉き)

だんし(檀紙)

紙肌に細かい雲状の凹凸があり、独特の重厚な味わいがある。現在は儀式や包装紙に使われることが多い。

たんぱんぶすま(単板襖)

襖骨の組子の上に下貼りの代わりに、1ミリ前後の薄い板を貼り、行程を簡略化した構造の襖。

だんぼーるぶすま(ダンボール襖)

典型的な量産襖。3層構造に重ねたダンボールを芯材に使った構造の襖。



ちょうじびき(丁子引き)

刷毛の毛を櫛状にして、縞模様を引き染めすること。

ちりいし(塵入り紙)

漉き模様技法のひとつで、楮の黒皮などを漉き込んだ紙。

ちりおとし(塵落とし)

切引手のこと。または角引手の下側が塵を落としやすいようになっている引手。

ついたて(衝立)

移動できる仕切り。一枚の板、襖、障子などに台をつけたもの。目隠しや風よけのために発達したが、室内の雰囲気演出する装置としても有効である。

てすき(手漉き)

紙を手で漉くこと。伝統的な紙の抄紙技法として、流し漉きと溜漉きに大別される。溜漉きは中国古来の技法で広く世界で行われているが、流し漉きは日本独特の和紙の抄紙技法である。和紙は伝統的には靱皮繊維(雁皮・三桎・楮など)を原料として、トロロアオイなどの植物性粘液(ネリ)を混入し、竹製の簀で繰り返しすくい上げ、紙層を重ねて漉く。⇨きかいすき(機械漉き)→わし(和紙)

てんぶくろ(天袋)

本来は床脇の上部につく小襖をいう。今では部屋の上部に取り付けられる戸棚、窓の上部、押入れの上部につける小襖もいう。⇨じぶくろ(地袋)

どうさ(礬水・礬砂)

膠に明礬(みょうばん)を溶かしたもの。礬水を紙に下塗りすると紙の強度が増し、目止めになり、墨や絵の具がこじむことがない。このような処理を施すことを「礬水引き」という。

とこのま(床の間)

中世以降の和風住宅の座敷につく鑑賞用空間。床を一段高くし。正面に書画の軸、床板に花瓶、香炉、壺、卓、置物などを配し、住む人の趣味、思想を反映させる場。格式の高い空間であるから床を背にする席(床前)を上座とする。床の間が招客を応接するために重要なものとなったのは室町時代の茶の湯からである。もとは書院造りの食人の座所と鎌倉時代の仏画をかけて礼拝する場とが融合したもの。床柱、床框、床板(畳床)、落とし掛け、綿板、印籠四分などからなる。種類は多く本床、蹴込床、踏込床、洞床、袋床、織部床、釣床、置床などがある。



とこわき(床脇) = わきどこ(脇床)

正式の床の間は左右に書院と床脇がついて床構えが完成する。床脇には違い欄、天袋、地袋がある。書院は床の間への採光をたすけ、床脇はその補助つまり書画の保管、筆記用具の収納の意味があったと思われる。床脇の違い欄は数多くの組み合わせがあり、その意匠は設計をする人の腕の見せどころであって、名建築の品格に学ぶところが多い。

とって(取手)

開き形式の建具の開閉のための金具。房をつけたものを用いることもある。

とびくも(飛雲)

漉き模様の技法のひとつで、最も古典的かつ伝統的なもの。

とぶすま(戸襖)

片面が板戸、片面が襖に仕立てたもの。

とりのこ(鳥の子)

狭義の意味では雁皮の生漉き紙(本鳥の子特号紙)を指す。広義ではすべての和紙を意味する場合もある。ここでは、機械漉きの無地のものを用い、手漉きのものに「本」の文字を付して「本鳥の子」と称して区別する。→[ほんどりのこ\(本鳥の子\)](#)

とりのこすきもよう(鳥の子漉き模様)

漉き模様襖紙のひとつ。本鳥の子漉き模様と違い、下地となる和紙を抄紙機で漉き、表の層(上掛け)の模様は手漉きと同様な技法で製作する。→[ほんどりのこすきもよう\(本鳥の子漉き模様\)](#)

とろろあおい(トロロアオイ)

アオイ科の一年草。この根を砕くと粘性液がとれ、これをネリとよび、流し漉きには欠かせない。

[▲ページトップへ戻る](#)

【な】

ながしこみもようし(流し込み模様紙)

漉き模様の技法のひとつで、型枠を用いて紙料を流し込み、模用をつくった紙。

ながしずき(流し漉き)

日本独自の手漉き技法。靱皮繊維(雁皮・三椏・楮など)の紙料にネリ(植物性粘液)を混ぜ、管桁ですくい上げ、全体を揺り動かしながら紙層をつくり、管桁を傾けて余分な紙料を流す。数回これを繰り返して厚さを調整する。→[てすき\(手漉き\)](#)



なつざしき(夏座敷)

夏、戸や窓を開け放し、風を取り込み涼しそうに装った座敷。襖などは葦戸や御簾に取り替える。→[よしど\(葦戸\)](#)・[みす\(御簾\)](#)

にまいだち(2枚立)

柱と柱の間が2枚の襖で構成されるもの。

ぬりぶち(塗り縁)

木地縁に対して、漆やカシューなどの塗料で塗ったものを指す。伝統的には漆を用いて、さまざまな技法で仕上げる。⇔[きじぶち\(木地縁\)](#)

ねこましょうじ(猫間障子)

紙貼りの障子の内部に小障子をつけ上下あるいは左右に開閉ができるようにしたもの。とくに上下に開閉するものを「摺り上げ障子」または「雪見障子」という。猫間とは寢間からきた語でもとは寢室の換気のための工夫。最近ではガラスを嵌め込み開放しないものもある。

ねり(ネリ)

流し漉きの際に紙料を分散させ安定させるのに用いる粘剤。トロロアオイやリウツキの根を砕いて樹液をとったもの。ネリの発見が和紙独自の製法を可能にした。本来は雁皮のもつ粘性を代用するために使われた。

[▲ページトップへ戻る](#)

【は】

はく(箔)

代表的なものとして、金箔、銀箔、プラチナ箔(白金)がある。金箔は銀を混入する割合によって青みがかかった金色に変化する。純度の高いものから、赤金、青金(色吉)、水金(定色)などと呼ばれる。銀箔は経年とともに腐食作用により変色するが、金箔とプラチナ箔は変化しない。箔押しや金銀砂子細工に用いられる。

はくおし(箔押し)

金箔などによる伝統的な加飾技法のひとつ。金・銀箔を紙や器物などの表面に貼付すること。

はけびき(刷毛引き) = はけぞめ(刷毛染め)

刷毛を用いて紙を染めること。さまざまな技法がある。

はけめ(刷毛目)

刷毛で紙を染める際にできる刷毛の引き跡。手引き独特の風合いになる。



はしょうふ(芭蕉布)

糸芭蕉の繊維を用いた織物。上質な襖紙としても用いられてきた。

はっぼうぶらすちっくぶすま(発砲プラスチック襖)

ダンボール襖とともに典型的な量産襖。発砲スチロールなどを芯材に使った構造の襖。

はばひろ【幅広(巾広)】

間中(3尺幅)の襖と比べて幅の広いものの総称。二間半、三間などと呼ばれるものがある。

はめごろし(嵌めごろし)

壁に取り付けたままで開閉できない襖のこと。

はりおび(貼帯)

襖に貼る帯状の紙。引手中心のものは、引手まわりの汚れがめだたない長所もあるが、デザイン上から用いることも多い。

はんぶすま(半襖)

高さが2尺から3尺までの襖のこと。

びーすかこう(ピース加工)

エアースプレー(エアブラシ)を用いて、襖紙に色をまかしてつける技法。

ひきちがい(引き違い)

2本以上の溝に入れ、引き違えることができるもの。

ひきて(引手)

襖を開閉する際に手を掛けるために取り付ける器具。手掛けとも呼ばれる。金属製や木製のものなどがあり、生地を生かしたものと化学的な表面加工や漆塗り仕上げなどをしたものもある。最近ではプラスチック製の安いものもある。

ひきてさわり(引手さわり)

引手のまわりに別の紙や布を貼り、汚れを目立たなくするためにすること。これを引手さわりとか手ざわり、手当たりともいう。デザイン的に用いることもある。



ひょうぶ(表具)

掛け軸の書画をとり囲む表装部分。本紙に裏打ちして補強するとともに装飾的な機能、壁に掛けて鑑賞できる機能、巻き込んで収納、保管できる機能を合わせもたせる。全体を天地に分け、その中間に書画の本紙を一文字とよばれる横布ではさみ、下部に軸木、上部に掛緒をつけて下げる。その形式に応じて真、行、草に分かれ、風帯のつく経仕立て、装飾性をもたせない文人仕立てなどがある。表具を仕立てる専門家が表具師で、現在では襖も製作する。

びょうぶ(屏風)

折りたたみが可能な仕切り。紙または布を木の骨組みに貼り、周囲に木枠をめぐらせた襖状の仕切りを2枚、4枚、6枚と横につらね、交互に曲げて立て掛ける。2枚折りのものを二曲、4枚折りのものを四曲、6枚折りのものを六曲といわれ、単独で用いるものを半双、2つを組み合わせて用いるものを一双と呼ぶ。六曲一双となると、6枚折り(6面)が2つで一つの画面を構成する。すなわち、12面もの横長の大作となる。金箔だけを貼った金屏風のように無地のもののほか書画の表装としての機能美ももっている。日本画の大作は屏風造りが多い。

ふくろがみ(袋紙)

袋貼りに使われる紙。石州半紙、桑子り、茶子りなどの和紙をいう。

ふくろがみ(袋貼り)＝うけがみ(浮け貼り)

下貼りの最後の工程で、紙の周囲にだけ糊をつけて貼ること。内部が浮いた袋状になる。上袋、下袋とがあり、上袋には喰い裂きをした下貼り紙を用いる。上貼りを浮かせた状態で柔らかく見せ、また、貼り替えを容易にするために用いる。→ふくろがみ(袋紙)

ふすましょうじ(襖障子)

古くは建具を総称して障子(そうじ)といい、襖障子、明かり障子、衝立障子などの種類がある。平安時代の障子は襖障子のことで、今日の襖をさす。→あかりしょうじ(明障子)

ふとぶち(太縁)⇔ほそぶち(細縁)

縁の見付きが6分5厘をこえるもの。8分や1寸のものがよく用いられる。

ふろさきびょうぶ(風炉先屏風)

茶の湯で、広間などに風炉を置くとき道具置の結界として用いる2枚折りの丈の低い屏風。風炉先ともいう。→びょうぶ(屏風)

ほうしょうがみ(奉書紙)

皺がなく純白できめの美しい紙。福井県武生市の産は有名。

ぼかしぞめ(ぼかし染め)

濡れた刷毛の一部に色を挿し、諧調をつけた刷毛染めをすること。



ほそかわし(細川紙)

埼玉県小川町が産地。語源は、紀州高野山山麓の細川奉書が小川町に伝えられて発達したことによる。下貼りに用いる紙の一種。楮を原料として漉いたもので強靱である。

ほそぶち(細縁)⇔ふとぶち(太縁)

縁の見付きが6分5厘より細いもの。5分5厘や4分のものがよく用いられる。

ほんどりのこ(本鳥の子)

本来は雁皮紙をさし、その色合いが鶏卵の殻の淡黄色に似ているところから鳥の子と呼ばれ、和紙を代表するもの。手漉きのものには、「本」を鳥の子の語頭に付して機械漉きのものと区別する。→[どりのこ\(鳥の子\)](#)

ほんどりのこすきもよう(本鳥の子漉き模様)

すべて手漉きによって漉き込み模様をつけたもので、主として三楮や楮などの原料で、流し込みなどのさまざまな技法により模様がつけられる。

ほんま(本間)⇒きょうま(京間)

[▲ページトップへ戻る](#)

【ま】

まし(麻紙)

麻の繊維を原料として漉いた紙。

まなか(間中)

内法幅1間の中に2枚の襖が入るもの。

まにあいし(間以合紙)

摂津の名塩(西宮市)に産する特殊な土を混ぜて漉いた紙。多少青みがかかったもので変色しにくい。葛布・芭蕉布などの裏打ちに用いられる。

みぎがって(右勝手)

2枚の襖が引き違いになっているときに向かって右の襖が手前にあること。いわゆる右前でこれが通常の形とされる。本勝手ともいう。

みす(御簾)

すだれ。葦戸と同じように、夏、襖や障子などと入れ替え夏座敷として用いる。→[なつざしき\(夏座敷\)](#)



みずこしょうじ(水腰障子)

水は「見ず」の意。腰板のない障子。足元まで明るくモダンな感じがする。下框を幅広くとって下部の安定感を補う。組子のデザインによってさまざまなパターンができる。

みずたまし(水玉紙)

漉き模用の技法のひとつで、水滴で水玉の模様をつかった紙。

みずもみ(水揉み)

和紙を染料で染め、濡れたままで揉み、揉皺に濃く染め付けをする技法。

みつまし(三椏紙)

三椏の繊維を原料として漉いた紙。雁皮紙とともに和紙を代表するもので、生漉きのものでは本鳥の子二号紙が代表的。

みなとがみ(湊紙)

壁・襖の腰貼りに用いる紙。和泉国湊村で作られたことからこの名がある。

むしろびき(筵引き)

筵(むしろ)や縄の上に紙を置き、刷毛染めすること。凹凸による染めむらができる。

[▲ページトップへ戻る](#)

【や】

よしど(葦戸)

葦管(よしず)を張った戸。御簾と同じように、夏、襖や障子などと入れ替え夏座敷として用いる。→[なつざしき\(夏座敷\)](#)

よまいだち(4枚立)

柱と柱の間に4枚の襖が入るもの。内法が9尺の場合「九四(きゅうし)」、または「9尺4枚立」、2間の場合「2間4枚立」、または「二間」、同じく「2間半4枚立」、または「二間半」、3間の場合「3間4枚立」、または「三間」とそれぞれ呼ばれる。

[▲ページトップへ戻る](#)

【ら】

らくすいし(落水紙)

漉き模用の技法のひとつで、水滴で市松などの模様をつかった紙。楽水紙とは異なる。



らんま(欄間)

天井と鴨居、または長押との間に採光・通風のために格子または透かし彫りの板を取り付けてある所。

りょうさんぶすま(量産襖)

大量生産を目的として作られる襖のことで、ダンボール襖と発砲プラスチック襖に代表される。

りょうし(料紙)

詩歌などを書く用紙。主に鳥の子や麻紙などを用い、金銀砂子細工などで華麗に装飾したものもある。源氏物語絵巻の詞書きなどに見られる。

りんてんいんさつ(輪転印刷)

巻き取りの原紙を使って、シリンダーの版で連続して印刷する方法。

[▲ページトップへ戻る](#)

【わ】

わし(和紙)

わが国特有の紙。伝統的な手漉きによるものと、機械漉きによるものがある。手漉き和紙は主として靱皮繊維(雁皮・三桎・楮など)を原料とするもので、鳥の子紙、半紙、奉書などがある。機械漉き和紙は主として、木材パルプ・故紙・マニラ麻などを原料とする。襖紙、障子紙、ちり紙、書道用紙などがある。

→[てすき\(手漉き\)](#)・[えちぜんわし\(越前和紙\)](#)